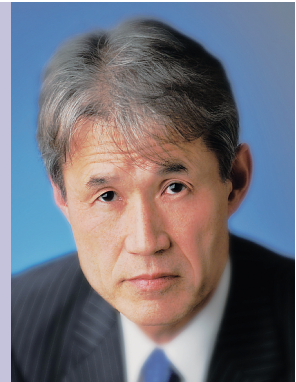


# 第1回 ASAF 会議とIASB との定期協議最終回を終えて

ASBJ 委員長 にしかわ いく お  
**西川 郁生**



第1回の会計基準アドバイザー・フォーラム (ASAF) 会議は2013年4月8、9日に、ロンドンの国際会計基準審議会 (IASB) 本部のボード会議室において開催された。丁度1か月後の5月9、10日には、IASBとの公式的な定期協議の最終回が東京の企業会計基準委員会 (ASBJ) オフィスで開催された。この2つの会議に関連して本号は特集記事 (16 頁) をまとめている。本稿と特集を合わせてご一読いただければ幸いである。

## ASAF 会議の当初メンバー

米国財務会計基準審議会 (FASB) との共同ボード会議を通じて進めてきた MoU プロジェクトが概ね完了に向かう中で、幅広い会計基準設定主体との多国間関係を構築し、そこからのインプットを IASB の基準開発に生かすため、IFRS 財団は ASAF を設置した。いわゆるバイからマルチへ、という明確なコンセプトに基づくものである。

新しい会議体の立ち上げにあたっては、当初の12メンバーの選定で混乱することは好ましくなかった。この点で、IFRS 財団及びIASBの首脳陣による短期間での周到なメンバー選定が、スムーズな会議の実施を可能にしたと考え

る。

米国は ASAF の MoU に署名可能か当初不透明であったが、IASB では FASB への参加を強く希望しており、MoU のハードルを当初案より下げるなどして、FASB の参加を可能にした。欧州については、EU のエンドースメント評価機関である欧州財務報告諮問グループ (EFRAG) が参加することが欠かせないと IASB は考えたとみられる。欧州の一部には EFRAG ではなく、欧州の各国設定主体だけから参加すべきという意見があった。しかし、IASB は早い段階から EFRAG の参加を強く示唆し、混乱を避けようとしていた。アジア・オセアニアでアジア・オセアニア会計基準設定主体グループ (AOSSG) が選ばれ、南アメリカ (ブラジルに代表される) やアフリカ (南アフリカに代表される) など地域団体が網羅されたことは EFRAG の選任と無関係ではないとみられる。AOSSG の場合、EFRAG と異なり、バーチャルな団体であり、アジア・オセアニアが世界枠の1つをとっても (結果的に欧州とAOに1枠ずつ配分された) AO 国の枠が増えず AO 主要国間の争いの要因となり得た。そういう波乱要因があった中で、ASBJ については、早い段階から枠が確保されているようなメッセージが IASB 幹部の発言で世界に発信され、ASBJ の選出は当確という雰囲気が流れた

おかげで、国内で無用な不安が生じることもなかった。

## 第1回 ASAF 会議の会議内容

第1回の ASAF 会議はハンス・フーガーホースト IASB 議長の議事進行のもと進められ、概念フレームワークには2日で8時間の議論が行われた。詳細は関口常勤委員の会議報告をお読みいただきたいが、概念フレームワークの純利益に関していえば、以前の財務諸表表示プロジェクトの初期に包括利益計算書での表示を止める方向で議論していた頃に比べれば、概念の中で明確に位置付けるといった目標を持って臨んでいることは間違いない。

その上で、リサイクルを必要とする橋渡し項目等（貸借対照表目的と損益計算書項目とで資産負債の測定が異なる場合に OCI でつなぐ）の考え方の整理を行っている点も評価できる。ただ、橋渡し項目等以外にも OCI が出る場合があるという方向に行くと、リサイクルしないものを容認することになる。ASAF においても、日本と異なり、損益は2度発生すべきでない（リサイクルを全否定する考え方）という持論を述べた ASAF メンバーもあり、ボードでの今後の議論を注視する必要がある。

会議は、概念のほか、会議の進め方、金融資産の減損等が議論された。進め方に関しては、ASBJ が狙っている会議資料作成を可能とするための手続を求めた。

第1回 ASAF 会議の IASB ボードメンバーからの参加者は、議長のほか、副議長、概念フレームワーク担当のボードメンバー（ボードアドバイザー）が参加したが、基本的には聞き役に徹していた。

第1回 ASAF 会議の内容については、4月の企業会計審議会で報告する機会を得た。審議

会は IFRS の国内での扱いを審議しており、その IFRS を巡る環境の一つとして ASAF について説明を求められたと考えている。

## ASAF への国内対応

ASAF 参加メンバーは個人的意見を期待されるのではなく、国や地域を代表する意見を発信することが期待されている。第1回は参加メンバーの決定から会議までの期間が短く、わが国での意見集約の機会を持つことは困難であったが、ASAF の前週にアジェンダ・コンサルテーションに関する協議会を開き、市場関係者の主要な意見を聴取することができた。

今後、国内の ASAF 対応の枠組みを明確化し、それらを定期的に開催することで意見集約を常時行っていくことが必要となる。その場合、2011年のIASBアジェンダ・コンサルテーションへのコメント対応のために市場関係者を集めたアジェンダ・コンサルテーションに関する協議会は、金融庁と FASB が共同事務局となる形で、いわゆるオールジャパンの意見集約にとって優れた枠組みであり、名称変更を含む改組をして継続していくことが期待される。

より専門的な場として、ASBJ の専門委員会制度に乗せて ASAF 対応専門委員会を5月に設置した。この会議は通常の専門委員会同様公開で審議が行われることとなる。

いずれにせよ、日本のみならず各国でも ASAF への期待感は引き続き高いものとみられる。市場関係者は ASAF が IASB ボードのような決定の場ではないと分かっている、自らの声が ASAF メンバーに届くことに期待しているものと思う。ASBJ としては、日本の意見に関して十分な発信をしていくこととなる。

## AOSSG の ASAF 対応の枠組み

AOSSG では ASAF メンバーに選ばれない主要国が出ることが想定されることから、昨年 11 月のネパールでの総会時から、ASAF への意見発信の枠組みが必要であるという議論がなされていた。具体的には AOSSG 内に ASAF ワーキングパーティが組成され、AOSSG を代表する香港（現 AOSSG 副議長国）が各国の意見をまとめて、ASAF で発言することとなった。ASAF の当面の大きな議題である概念フレームワークについては、大きなプロジェクトに対応して組成されるワーキンググループが設置され、日本がリーダー国となった。

概念フレームワークに関する意見集約は ASBJ の関口委員が電話会議の結果を踏まえて取りまとめることとなり、香港はそれを基に第 1 回の ASAF で発言を行った。

## ASAF メンバー間での意見交換

ASAF はアドバイザリー・フォーラムであるため、IASB に対し、どう影響力を強めていくか、考えていかなければならない。メンバーが一致した意見を持てれば、相当強い意見になるが、現実にはそのようなことが期待できる方が稀である。このため、ASBJ では常に他のメンバーの考え方を把握したり、意見交換をしておく必要があると考えている。

FASB とは 2006 年から定期協議を継続してきた。FASB との定期協議はもともと IASB への意見発信力を強める狙いがあったので、これを続けることのメリットは大きいと考える。レスリー・サイドマン現議長に代わるラッセル・ゴールデン新議長（7 月に就任予定）との間では秋に東京で開催する ASBJ/FASB 定期協議

の日程を決めたところである。

EFRAG との会合はこれまで不定期に行っており、直近では今年の 3 月にブラッセルで 1 日半の会合を持っている。これをフランソワーズ・フローレス議長と合意して、年 1 回の定期会合化するとともに、ビデオ会議をそれ以上頻繁に行うこととし、6 月下旬に 3 時間のビデオ会議を開くこととしている。

## 第 17 回 ASBJ/IASB 定期協議の会議内容

定期協議においても最も時間を割いたのは概念フレームワークであった。第 1 回の ASAF で日本の主張は口頭ベースで述べてきたが、定期協議の場合は、会議資料を ASBJ 側が作成しているので、より論理的な説明を行う機会とすることができた。概念フレームワークについては、純利益と OCI、測定、開示、認識と認識の中止、その他に分割して議論を行った。ここでも OCI と測定のリンクを強調し、橋渡し項目等をベースに議論を行った。

金融資産の減損については、ステージ分けをして最初のステージについて 1 年分の予想損失を見込むことには賛成するが、ステージ 1 からステージ 2 への分類替に著しい信用の悪化を求める相対アプローチについては、反対の立場で議論をした。

## 公式会議の終了後の IASB との関係強化

定期協議が終了した 5 月 10 日の昼の時間帯にフーガーホースト議長とともに、記者会見を行い、同日公表のプレスリリースに記載のとおり、両者の緊密な関係を継続し、さらに強化することを表明した。

ASBJ としては、IASB との緊密な関係が強

い発信力のためには欠かせないと考えている。定期協議が終了したこの時点から、信頼に基づく多層的な関係を深めることで、関係のさらなる緊密化を進めていくことになる。

緊密な作業としてフーガーホースト議長が本号の対談でも触れているリサーチに関し、ASBJ が積極的に取り組むことがまず考えられる。

直接的人的貢献として、現在、ASBJ から2名のスタッフをIASB スタッフとしてロンドンに送っているが、さらにハイレベルな貢献を目指して、川西安喜ディレクター（有限責任あずさ監査法人）がスタッフとして5月から正式に参加している。概念フレームワークについては長年 FASB で概念プロジェクト担当であった FASB のディレクターが既に IASB の概念プロ

ジェクトに関わっているが、川西ディレクターも FASB で概念プロジェクトに関わっていた実績が評価されたものとみられる。川西ディレクターはこの4月から ASBJ のディレクター（国際担当）に就任しているが、この10年 FASB の国際研究員でもあり、今回、IASB の概念担当スタッフとなることで、同時に3設定主体に関与するという稀有な立場となった。同氏の概念フレームワーク・プロジェクトへの貢献を大いに期待するところである。スタッフ派遣の充実はさらに進めたい。

加えて常時情報交換や意見交換を行っていくことも重要であり、常勤委員やディレクターレベルでの双方の活動のアップデートやスタッフレベルでの個別論点等についての意見交換の頻度を高めること等を行っていきたい。